



**京セラ株式会社 2019年3月期 第3四半期 決算カンファレンスコール**  
(2019年2月1日実施)

代表取締役社長 谷本 秀夫 スピーチ

※今期より IFRS を適用したことにより、前期実績の組替を行っています。

**<1. (中表紙) 2019年3月期第3四半期 決算概要>**

**<2. 2019年3月期第3四半期累計 決算概要>**

こちらの表に、第3四半期累計の決算概要を示しています。当期の売上高は、前年同期に比べ6%増加の1兆2,144億円となり、第3四半期累計として過去最高となりました。

利益については、売上拡大及びコスト低減に努めたものの、ソーラーエネルギー事業及び有機材料事業での損失、約685億円の計上により前年同期に比べ減少しました。

設備投資及び研究開発費については、部品事業を中心に各事業で積極的に進めていることから、前年同期に比べ大幅に増加しました。減価償却費については、償却方法の変更により減少しました。

なお、当期の平均為替レートは、対米ドルは前年同期に比べ1円円高の111円、対ユーロは変わらず129円となり、売上高へは約30億円の押し下げ要因となりました。なお、税引前利益への影響はほとんどありません。

**<3. 2019年3月期第3四半期累計 事業セグメント別売上高>**

ソーラーエネルギー事業の需要減により「生活・環境」セグメントの売上が減少したものの、「電子デバイス」や「産業・自動車用部品」の売上がいずれも2桁増となり、グループ全体の増収を牽引しました。

**<4. 2019年3月期第3四半期累計 事業セグメント別利益>**

利益については、「産業・自動車用部品」、「電子デバイス」、「コミュニケーション」が大幅な増益となったものの、「半導体関連部品」及び「生活・環境」が一時的な損失を計上したことを主因に減益となりました。

#### <5. 2019年3月期第3四半期累計 前年同期比増減要因>

左側の図は、各セグメントの売上と利益の増減額をプロットしたものです。横軸は売上高、縦軸は事業利益の増減額です。

赤枠で囲んでいる「電子デバイス」、「産業・自動車用部品」、「ドキュメントソリューション」は増収増益となったセグメントです。これらの好調な部門については、前期から積極的な投資を実施してきた効果があらわれています。

産業機械用セラミック部品やコンデンサの増産投資に加え、機械工具事業やAVX、「ドキュメントソリューション」においては前期より実施しているM&Aの寄与もあり、各事業の業績を伸ばすことが出来ました。

青枠の「コミュニケーション」は、低採算製品の縮小を進めてきたことが収益の改善に繋がっています。通信機器事業では、採算面で課題のあった海外端末事業において収益性を重視するという方針のもと、期初からラインナップの見直しを実施しており、着実に改善させることが出来ています。

緑枠の「半導体関連部品」及び「生活・環境」では、一時的な損失の計上により大幅な減益となりました。

「半導体関連部品」は、光通信やスマートフォン用セラミックパッケージの需要減により減収となり、利益は有機材料事業での162億円の固定資産の減損を主因に減少しました。有機材料事業においては、不採算品種の絞り込みや固定費の低減を進めており、採算は改善傾向にあるものの、スマートフォン向け基板の需要低迷等により赤字を脱却するまでには至っておりません。そのため今般、生産設備及びのれんを減損しました。

また、「生活・環境」では、昨年11月に公表しましたソーラーエネルギー事業におけるポリシリコン原材料の長期購入契約の和解等に伴い、523億円の費用を計上しました。

この2つの事業については、当期に多額の損失を計上することとなりましたが、来期より再スタートを図り、採算改善を加速させてまいります。

#### <6. 2019年3月期第3四半期（3ヵ月）決算概要>

6ページでは第3四半期の3ヵ月間の業績を第2四半期と比較しています。

売上高は横ばいですが、利益は減損損失等の影響により減少しました。

続きまして、事業セグメントの状況をご説明します。

#### <7. 2019年3月期第3四半期（3ヵ月）事業セグメント別売上高>

部品事業の売上は、スマートフォン向け部品等の販売減速を受け微減となり、「生活・環境」

ではソーラーエネルギー事業の売上が減少しました。

一方、「コミュニケーション」では新モデルが貢献し、また、「ドキュメントソリューション」においては積極的な拡販により、いずれも増収とすることが出来ました。

#### <8. 2019年3月期第3四半期（3ヵ月）事業セグメント別利益>

利益については、「半導体関連部品」及び「生活・環境」が一時損失の計上により大きく減益となりました。

一方、「コミュニケーション」は、通信機器事業の海外事業の採算改善が進んだことに加え、国内向けの新モデルも寄与したことから増益となり、収益性も向上させることが出来ました。

以上が第3四半期実績の説明です。続いて、業績予想についてご説明します。

#### <9.（中表紙）2019年3月期通期業績予想>

#### <10. 2019年3月期 業績予想>

第3四半期までの実績及び第4四半期の見通しを踏まえ、11月末に公表しました業績予想を本日、下方修正しました。

なお、前期比では営業利益、税引前利益が減益となりますが、親会社の所有者に帰属する当期利益は、税金費用が前期に比べ減少するため増益を予想しています。

また、減価償却費及び為替レートについても進捗を踏まえ見直しています。  
続いて、セグメント別の売上高、事業利益についてご説明します。

#### <11. 2019年3月期 事業セグメント別売上高予想>

セグメント別の売上高については「コミュニケーション」を除き、下方修正しました。

#### <12. 2019年3月期 事業セグメント別利益予想>

利益については、「電子デバイス」及び「コミュニケーション」は、第3四半期までに利益の改善が想定以上に進んだことを踏まえ上方修正しています。

一方、「産業・自動車用部品」、「半導体関連部品」、「ドキュメントソリューション」は下方修正しました。

#### <13. 2019年3月期 業績予想修正の主な要因>

今回の業績予想修正の主な要因は2点あります。

1点目は主要市場での需要減です。部品事業では、足元のスマートフォン市場の生産調整に加え、産業機械市場でも半導体製造装置用部品等での投資抑制の影響を受けています。また、

機器・システム事業においては、「ドキュメントソリューション」では欧米市場での販売が、「生活・環境」ではソーラーエネルギー事業の売上が前回予想を下回る見通しです。

2点目は、第3四半期に計上した、「半導体関連部品」での固定資産の減損損失の影響です。11月の業績予想には織り込んでいなかったことから、今回予想に反映しています。

#### ＜14. 売上高及び税引前利益の推移＞

当期の業績予想は下方修正しましたが、2期連続で過去最高の売上高を更新できる見通しです。

足元では全般的に調整感はあるものの、来期も引き続きIoTやADAS等の市場の拡大が見込まれることに加え、5Gのサービス開始に向けた需要も期待されます。また、M&Aについても引き続き積極的に取り組んでまいります。

当期には多額の一時損失を計上することとなりましたが、課題事業については、これまで収益を押し下げていた主な要因を解消することができ、今後のリスクを軽減することができたものと考えています。来期以降は採算改善を加速させ、赤字事業を早急に黒字化することで、利益の拡大に努めてまいります。

以上